■月刊「OISCA」10月号付録■通巻660号■平成30年10月1日印刷■平成30年7月5日発行

よみがえれ！海岸林

東日本大震災復興支援「海岸林再生プロジェクト10ヵ年計画」を、
元日経新聞論説委員の小林省太がさまざまな角度でお伝えします。

Vol.3

東日本大震災のような大災害の正確な記録を残すことは簡単ではない。
それでも、できる限りきちんと記録することが、海岸林の役割や
プロジェクトの意味を考えるうえでも欠かせない。
2011（平成23）年3月11日（金）午後2時46分の地震、そしてその後の津波。
「そのときのこと」を宮城県名取市の北釜集落に住んでいた人々に聞いた。

津波に襲われる北釜集落。集会所（赤丸）周辺は津波の到達が遅れているのが分かる（午後3時56分／毎日新聞社提供 手塚耕一郎カメラマン撮影）

「しまった。水を止め忘れたか」。

名取市中心部での会合中に地震にあった森清さん（56／年齢は震災当時、以下同じ）は北釜に戻ると、自分のビニールハウスの中が水びたしになっているのに驚いた。しかし、水はほかの畑でも噴き出している。アリジゴクにはまったように動けず、トラクターに引っ張ってもらう軽トラックもあった。誰も見たことはなかったが、地下水位の高い砂地の北釜では液状化現象が起きていたのである。

消防団で北釜地区の責任者を務めていた森さんには、住民の安全に責任があった。いったん自宅に戻り、慌てる妻や近所の人に「空港へ」と指示すると、地区を回って避難を呼びかけようと広報車が止めてある小屋に向かった。しかし、車にはいち早く別の消防団員が乗って活動を始めていた――。

森清さん

話は少しさかのぼる。

北釜には高台がない。津波の不安は長く人々の頭にあった。一番近い安全な建物は仙台空港のターミナルビル（中面写真❶）である。集落の中心部（❼）から大人なら歩いて5、6分。そこを万一の場合の避難所にすることで空港側と話がまとまると、しばらくしてチリで大地震が起きた。

2010（平成22）年2月27日（土）午後（日本時間）。マグニチュード8・8で、翌日の朝、宮城県以北の東北地方太平洋岸に大津波警報が出た。日本での大津波警報は17年ぶり。気象庁は最大3mの津波が押し寄せるとの予報を発表した。

北釜の多くの住民は町内会や消防団の指示にしたがって空港に避難した。だが、仙台港の潮位の変化は最大で0・9m。被害はなく、夕方まで椅子に腰かけていた高齢者は「家ならゴロゴロしてるのに。疲れた」とこぼした。

もう一つの地震が震災の2日前、3月9日（水）の昼前にあった。北釜は震度4。警報は出なかったが、消防団は広報車を出した。その時、集落の中で空港利用者向けの駐車場を経営する団員が、「仕事が立て込んでいて……」と森さんに手を合わせた。「大丈夫だから」と森さんは応じ、都合のつく団員とともに海辺の釣り人にも注意を促すため車を走らせた。

震災の日にいち早く活動を始めた消防団員は、2日前に参加できなかった櫻井歩さん（48）。「この間は申し訳ないっていう思いがあったんでしょう、多分」。いま、森さんはそう言う。

もう一回りしてきます

広報車に合流した森さんは団員4人で地区を回り、まず一人暮らしの高齢者や体の悪い人に声をかけた。柱にしがみついて「いいから」と逃げようとしない人も、無理やり車に乗せた。北釜橋（❸）には地震で段差ができ車は渡れなかったので、そこからは歩いて空港に逃げるよう言い聞かせ、集落に戻った。

高梨仁さん

しばらく回った後、集会所（❻）の前で森さんだけ車を降りた。無線で名取市役所や消防署と連絡を取るためである。携帯電話は通じない。広報車に残った3人は「もう一回りしてきます」と言って南に向かった。結局、無線はうまくつながらなかった。

森さんと同じ会合に出ていた町内会副会長の高梨仁さん（61）も自宅に戻った後、避難を呼びかけて歩き回った。自宅では飲みかけの焼酎の瓶が倒れた程度で、「たいしたことない」と思い、地区の役員が集まる手はずになっていた一次避難所の集会所に向かう前、姉・多美子さん（75）の家に寄った。姉はいたが姿は見えなかった。「駄目だぞ、逃げねえと」と呼びかけると、「わかった。今逃げるから」と声だけ聞こえた。

鈴木英二さん

鈴木英二さん（70）は市内の医院で、持病の治療のため点滴を受けていた。地震に驚き、自分で点滴の針を抜いて外に飛び出した。車で北釜の自宅に戻ったが、森さんや高梨さんと違い、いつもつけるカーラジオをこの時はつけなかった。なぜか、津波のことはすっぽり頭から抜け落ちていた。

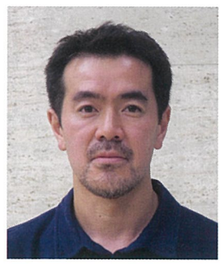
自宅に誰もいないので不思議に思い、今度は自分が経営する会社に向かった。貞山運河（❹）の西側、空港に近い三英駐車場（❷）である。会社にも誰もいない。と、いったんは空港に逃げていた社員が一人戻ってきた。相変わらず津波が念頭にない鈴木さんは、地震でモノが散乱した事務所を片づけようと、社員に声をかけた。

櫻井重夫さん

櫻井重夫さん（60）は自宅で野菜の出荷準備をしていた。地震で積み上げた葉物の野菜が「ぐじゅぐじゅ」に崩れた。隣家の人も促して空港に向かったのは、大地震の際の行動が頭に入っていたからだろう。着いてから30分以上、余震以外はなにも起きなかった。

毎日新聞東京本社のカメラマン手塚耕一郎さん（33）はヘリコプターで春の選抜高校野球出場校などを取材中、仙台湾の海上で地震を知った。仙台駅周辺では人が建物から飛び出し、火災が見えた。ビール工場のタンクがひっくり返っていた。ただ、海岸に変化はなかった。予定通り、給油のため午後3時40分過ぎに仙台空港に着陸した。しかし、空港は機能停止の状態で給油を手配できない。燃料が乏しいまま、思案に暮れた。

北釜には津波は来ねえ



手塚耕一郎さん

森さん、高梨さん、鈴木さん、櫻井重夫さん、手塚さん……。津波の襲来を知ったのは、そんな時である。

約100世帯、400人が住む北釜では、テレビやラジオで地震の規模や津波の危険を知った人が多かった。実際、大勢が櫻井重夫さんのように避難した。しかし、「リアス式の岩手とは違う。北釜ってところは昔っから津波は来ねえんだ」という声もあった。消防団長の経験者でさえ、「来ねえから」と言って逃げようとしなかった。

東の海岸線に砂塵がまきあがるのを見て、森さんは集会所から空港に走った。途中、北釜橋で空港から戻ろうとする住民に出会った。避難したのに何も起こらず、「去年とお

❶仙台空港ターミナルビル　❷三英駐車場　❸北釜橋　❹貞山運河　❺東北大学ボート部艇庫　❻北釜集会所　❼北釜中心部の交差点
❽海岸林の小高い丘の部分。　←― 矢印は津波で流された家屋の動き（森清氏が記録）　写真は1999年撮影（東北地域づくり協会提供）

んなじだ」と思ったのである。彼はUターンして、森さんと一緒に一目散に走った。

集会所近くにいた高梨さんは、エアコンの室外機などを伝って平屋建ての集会所の屋根に上った。「普通なら上がれない。馬鹿力が出たんだね。空港まで走っていたら駄目だったかもしれない」。屋根にはすでに町内会長ら男性が3人いた。少し西、貞山運河のほとりにあった3階建ての東北大ボート部の艇庫（❺）の上にも人がいるのが見えた。

高梨さんの次に男性（82）が上ろうとした。

「手ぇ出せ！」と高梨さん。ぎりぎりで届かず、高梨さんの耳には「助けてけろー」という叫び声が残った。屋根のてっぺんの下50㎝まで水が迫り、車が折り重なって流れていく。

「こんで世の中終わりだな」と思った。

鈴木さんは800m先の海岸の松林が真っ黒な水に飲み込まれるのを見て、はじめて津波の危険に思い至った。社員と二人、車で空港に走った。ターミナルへの道は、円を描くように最後は東に向かう。津波が正面から迫る。建物の外階段にとり着き、2階まで上る前に下には水が押し寄せていた。

ターミナルビル2階では「ワーッ」と声があがって大騒ぎになった。ガラス張りの壁の向こうに、迫りくる津波が見えたからである。やがて空港に達した津波は、セスナ機を軽々と流し去っていった。

北釜集会所。中央の一番高い屋根の上で4人は一夜を明かした（2011年3月25日、名取市撮影）

手塚さんは防災ヘリと管制とのやりとりで津波を知った。操縦士が「飛ばなきゃだめだ」と言った。離陸すると海岸線に黄土色の土ぼこりが舞うのが見えた。そのあと、盛り上がった黒い海が町を覆いつくまではあっという間だった。

燃料がない。北釜と空港の上空にいたのは5分ほど。3回円を描くように飛び、失われる北釜の姿を記録した。「スケールが大きすぎて、人など細かいところには目がいかなかった」と手塚さんは言う。

高梨さんと知り合って写真を拡大、集会所の屋根にいる人の姿を見つけるのは2ヵ月後のことである。

空港で会えば「あんたも無事だったか」とほっとする。でなければ、消息は分からないままだ。屋根の上の50代、60代の男性4人は雪のちらつく中、互いに身体をぶつけ、流れてきたベッドを風よけに使って、一夜を過ごした。とにかく寒かった。「集会所の中の方が風がない」「そりゃ絶対ダメだ」「寝るな」と言いあい、屋根から動かなかった。

空港には、南隣の岩沼市などから避難してきた人を含め、1600人が集まっていた。高齢者には毛布が配られ、足りない分はビニール袋で補った。底に穴をあけて頭からかぶり、寒さをしのぐためである。乏しい食料は、空港の職員が差配して土産物の笹かまぼこや「萩の月」、ジュースや水などを少しずつ分けた。

丘のおかげで助かった

震災で犠牲になった町内会員51人の名が、慰霊碑に刻まれている。櫻井歩さんは避難を呼びかけ続けたマイクを握ったままの姿で、広報車の中で見つかった。一緒に亡くなった森達也さん（42）は、親戚筋の森清さんの仲人で結婚した消防団員である。長男が小学校6年生、妻は身重だった。ターミナルビルで、息子とともに避難していた妻に「うちのお父さんは？」と尋ねられ、森清さんは返事ができなかったという。消防団員は13人中4人が殉職した。高梨さんの姉・多美子さんは北釜でただ一人、行方不明のままだ。

森さんは震災後に自衛隊の捜索活動にも加わり、集落の家屋がどんなふうに流されたかを記録した。その地図と、手塚さんが撮った写真を見ると、分かることがある。集落の北側の家は南の方へ、南側の家は北の方に流されたこと。そして、集会所などがあった中心部への津波の襲来が遅れていることである。

海辺の松林は、集落の東側が5mほどの小高い丘（❽）になっていた。この辺りには防潮堤もあったが、「あの土手がなかったら集会所も一気に持ってかれたかもって思うよ」と高梨さん。森清さんは「丘のおかげで津波が遅れて助かったと思ってる。昔の人が何考えたか分かんないけど、丘は北釜守るためにつくったんじゃないのかな」と言った。

高梨さん、櫻井重夫さん、森清さんの3人は今、北釜から約5㎞離れた名取市内の別の場所でチンゲンサイ、コマツナをつくる農業会社を共同で経営している。鈴木さんは駐車場を再建し、農業法人もつくった。みな、「名取市海岸林再生の会」に入り、鈴木さんが会長、櫻井さんは副会長である。

写真家・志賀理江子さんの寄付で2015年に建てられた慰霊碑（2018年8月撮影）

☆次回は12月号に震災後の北釜の人々とオイスカの動きについて書く予定です。

ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC™ C016564
www.fsc.org

公益財団法人
オイスカ
〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5
TEL(03)3322-5161 FAX(03)3324-7111
E-mail：kaiganrin@oisca.org

■海岸林再生プロジェクト ホームページ
http://www.oisca.org/kaiganrin/
ブログは毎日更新中！　オイスカ　海岸林　検索

プロジェクトへのご支援・ご協力お願いします！

■郵便局から（お名前・ご住所・電話番号などを払込取扱票に明記してください）
口座記号・番号……00100-6-482316
加入者名……海岸林再生募金
■銀行から（お名前・ご住所・電話番号などは別途下記にお知らせください）
銀行名……三菱UFJ銀行　永福町支店（支店番号347）
口　座……普通　0054080
名　義……公益財団法人オイスカ（コウエキザイダンホウジンオイスカ）